介 護 職 員 自 己 評 価 表

2026年4月7日

事業所名	介護老人保健施設 サンシャインきいれ

	正社員	非常勤社員
介護支援専門員	2人	
社会福祉士	1人	
介護福祉士	15人	2人
看護師	5人	2人
理学療法士	4人	
実務者研修修了者	5人	

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	4.0%	71.2%	24.7%	0.0%	

前回の改善計画

当施設は、超強化型老健として、在宅復帰を見据えた専門的なリハビリや機能訓練に取り組んでいる。日頃の見守りでは、身体機能や定量的な評価をもとに状態を把握し、転倒リスクについても数値に基づいた基準で判断しながら、その方に合った支援を行うようにしている。安全で安心できるケアを提供するため、スタッフ研修にも力を入れており、身体の使い方のクセや不良姿勢を減らす取り組みを進めている。また、歩行訓練では随意運動介助型電気刺激装置（IVES）を活用できるよう、講習会を実施し、理学療法士やトレーナーを中心に多職種で連携した機能訓練体制を整えている。認知症ケアでは、外部研修を通して回想療法のスキルを学び、SOLOデジタルセラピーや回想ライブラリーを活かした支援を、スタッフと主任がチームで取り組む形で進めている。さらに、睡眠状態にも着目し、睡眠の質と転倒リスクの関連を検討する計画である。

前回の改善計画に対する取組み結果

理学療法士と生活支援員を中心に、施設全体で改善に取り組んでいる。転倒リスクについては、定量的な評価と中途覚醒のデータを組み合わせて判断するようにしたことで、入所者ごとのリスクに合わせた支援ができるようになってきた。その一方で、頻繁に起こるリスクについては、もっと医療的な視点でのアプローチが必要だということも見えてきた。社内研修では、IVESを使った歩行練習だけでなく、姿勢援助やノーリフティングケア、腰痛予防の知識も深めている。さらに、ポジショニングで筋緊張を整えたり、身体の輪郭や軸の感覚を意識しやすくしたり、関節可動域を改善したうえで座位へ移行する支援方法なども練習している。こうした取り組みの結果、入所者様の歩行能力や生活の質が向上しただけでなく、スタッフの身体的な負担も軽くなってきている。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目（偏差値）		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	5.6%	66.7%	27.8%	0.0%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	0.0%	72.2%	27.8%	0.0%	100%
SECTION 3	食事について	5.6%	72.2%	22.2%	0.0%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	5.6%	72.2%	22.2%	0.0%	100%
SECTION 5	排泄について	5.6%	66.7%	27.8%	0.0%	100%
SECTION 6	入浴について	5.6%	66.7%	27.8%	0.0%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	5.6%	72.2%	22.2%	0.0%	100%
SECTION 8	服薬について	5.6%	61.1%	33.3%	0.0%	100%
SECTION 9	意思疎通について	0.0%	72.2%	27.8%	0.0%	100%
SECTION 10	行動障害について	0.0%	83.3%	16.7%	0.0%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	5.6%	77.8%	16.7%	0.0%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

生活リズムが整うことは、そのままQOLの向上につながる。ただ、睡眠データの解釈はスタッフによって見方が違うこともあり、チームで話し合いながら支援内容を調整していく必要があった。そこで、筋緊張を整えるためのポジショニング研修を行い、リラクゼーションも含めて「力任せの介助をしない」「引きずらない」「ずれ圧を減らす」といったノーリフティングケアを学んだ。姿勢や身体の内面状態を踏まえた支援を意識することで、拘縮の予防にもつながっている。認知症ケアの研修では、「見守り・観察するケア」の大切さを改めて共有した。認知症ケアは、その人を「人として理解する姿勢」が欠かせず、なぜその行動を選んだのか、どうしてそうしたかったのかを読み解くことが重要だと再確認した。生活歴や過去の経験を知るためには、ご家族からの聞き取りがとても大切だということもわかってきた。見守り方法を統一したことで、逆にスタッフ間のスキル差がはっきり見えるようになり、今後の課題がはっきりした。スタッフの精神的な負担については、定期的なスーパービジョンで気持ちを整理できる場をつくり、問題を放置しないように取り組んでいる。さらに、人事担当者による中立的な面談も取り入れ、精神的な負担を軽減できるよう努めている。

主任　江頭 晃

外部評価者

こちらの老健は、理学療法士およびトレーナーによって多様なリハビリが提供され、特に歩行に関するリハビリに注力して、IVESを活用した歩行訓練が実施されていました。身体機能の向上のみならず、リハビリ効果に影響する意欲面にも配慮し、目標設定や声掛けを通じてモチベーションを高める取り組みが行われていた点は評価できます。日常生活の支援においては、睡眠データを活用し、入眠時間や睡眠効率を指標として生活リズムの調整が図られていました。入眠までに2時間を超える場合には入眠障害の可能性を検討し、入眠時間の見直しや午後の活動量の調整など、適切な対応が取られていました。入眠の乱れは生活リズムやQOLに影響し、超強化型老健に求められる在宅復帰の妨げとなるため、こうした取り組みは重要な視点といえます。また、在宅復帰において課題となる認知症への支援については、ご家族の協力を得て生活歴を把握したうえで、多職種が連携して支援内容を検討し提供していました。家族を巻き込んだ支援は、入所者のみならず、在宅復帰後の家族の関わり方を考えるうえでも有意義な取り組みと考えられます。介護職員向けの勉強会では、認知機能や身体機能の改善に寄与するコグニサイズ、バランス能力や歩行能力の向上につながる歩行訓練など、心身の健康に資する内容が積極的に提供されていました。入所者が前向きに取り組めるケアを模索する姿勢は高く評価できます。QOLを意識した支援が実践されている点は、施設の大きな強みといえます。さらに、家族を巻き込み、多職種が協働して支援に取り組んでいる点も評価できます。総合的にみて、適切なリハビリ・機能訓練が提供され、人材育成にも力を注いでいることがうかがえました。今後も地域に根差した事業所として、さらなる発展を期待しております。

〒891-0151　鹿児島市光山2丁目3-56
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
博士（社会福祉学）　岩　崎　房　子